(1)2005(平成17年)12月25日(日曜日)
VOL.12
●無料版 ●隔月発行 ●部数 4万部 ●配布エリア 市内沢市 二戸市 葛巻町 北村

大好き！幾春別川
DAISUKII IKUSYUNBETSU RIVER

発行元：幾春別川ニュース編集委員会
編集委員長　峯崎　義輝
〒068-0007
岩見沢市7条9丁目　石狩川開発建設部岩見沢河川事務所内編集委員会事務局
TEL：0126-23-9555　FAX：0126-25-1697

少し肌寒い風が秋の到来を感じさせる9月28日、「フラワーライン秋」が幾春別川をよくする市民の会の主催で行われました。

フラワーラインは、たびたび捨てられていた幾春別川のゴミを減らし、反対に、緑を増やすために始まりました。今年で11年目を迎えます。

主な活動は花植えと雑草取りで、最終的な目標は幾春別川沿いを緑で埋めることです。多くの市民からも参加を募り、地域の人の手を借りながら、少しずつ緑を増やしてきています。

初めて参加した方も、今までに参加したことのある方も、みなさんの顔はとても生きいきとしていました。

回を重ねるたびに、参加者が増え地域に根付いてきたフラワーライン。この取材を通して、11年目となったフラワーラインが地域に数多くの良い影響を与えていることを実感させられました。目標達成まで、そう遠くはないのかもしれません。

参加者へのインタビュー

初は木だけを植えていましたが、花を植えたところ皆さんが喜んでくれたのがきっかけで毎年行うように。参加者は約100人～300人。他にも子どもとキャンプなどの活動をしています。とフラワーラインだけではなく、川を身近に感じるための活動を教えてくれました。

幾春別川をよくする市民の会
会長　峯崎　義輝さん

幾春別川をよくする市民の会
中浜　満枝さん

ラワーラインの目的は、川をきれいにすること。参加者が雑草と花を間違えないで植えた花を抜かないように気をつけてくれているので、ありがたく思います。最終的には幾春別川沿い全てに花を植えていきたいです。

内会長として地域活動に率先することが大切だと思い、参加しました。狩野橋を通った人がきれいな花を眺めて心を和ませることができるので、フラワーラインはとても良い取組みだと思す。これからも参加していきます。

若松町内会
会長　竹内　義光さん

来年も、多くのみなさまのご参加をお待ちしております！

流域の野鳥　冬

黄色いくちばし「クロツグミ」

10月下旬の早朝、紅葉の中、久しぶりに川のせせらぎを聞きながら三笠博物館裏の幾春別川サイクリング道路を歩いてみた。

静かだ。早速、ハシブトカラ・ゴジュウカラ・アカゲラ等のお出迎えだ。相変わらずカラ類は忙しそうに小枝から小枝へと飛び周り、アカゲラは木の幹をつつきながら、厳しい冬に向かっての顔探しに余念がない。お馴染みの鳥達に出会えて一安心。

気を良くしてトンネルに差しかかると、ピョコピョコ何か動く三つの黒い影。目をこらし静かに歩を付けると何と、クロツグミのオス1羽とメス2羽だ。とっくに暖かい地方へ渡りをしたと思っていたら、未だいました。渡りの途中なのか思わず「暖いのに早く渡りをしなくても大丈夫なの？」と声をかける。くちばしを使って落ち葉を勢いよくまくり上げ、少なくなってきている昆虫を捕って食べている。両方とも離れず近寄らず人の前を歩いている。男としては2羽のメスを従えてうらやましい限りだ。やっぱり、渡り前のえさ探しに余念がないようだ。

クロツグミは、四月の下旬、木々の葉が芽吹き始めたころ新緑の森に、他の夏鳥よりも少し早めにお気に入りの森へ飛来する。

黒い体に、目の周りの黄色と黄色いくちばしが可愛いクロツグミ。青、キョロリキョロリギャラキャラツリと、大きな声でさえずるクロツグミの姿が待ち遠しい。

（岩見沢野鳥の会　若林信男）

喜びが広がる幾春別川!!

※上のタイトルは、緑中学校生徒会の9人全員で考えて、手書きで作成したものです。

地域住民と緑中生徒、そして主催者側が一丸となって目標達成に向けて躍進しているフラワーライン。ボランティアが100人から300人と、その輪が広がりつつあり、人と人との交流の場にもなっています。

また、花を植えれば見栄えが良くなり、とても和やかな雰囲気を地域に与えます。

色々な面で地域に良い影響を与えているフラワーライン。今後、さらにフラワーラインの活動が活発になれば良いと思います。

今回、この新聞を作った緑中学校生徒会のわたしたちも他の生徒と一緒に、年に数回参加しています。

今回初めて参加する人もいました。しかし、顔が生き生きしていることに変わりはありません。地域の人から何かを学んでいる人も取材中に見られました。わたしたちも、今後も積極的に活動していきたいです。

取材と編集の様子

▼3班に分かれ、取材してきた内容をレイアウト用紙にまとめる作業をしています。タイトル、本文、レイアウトなどについて意見を出し合いました

▲フラワーラインの本音に備え、取材方法について指導を受けました

▼話を聞く人、メモをとる人、録音する人、写真を撮影する人に役割分担し、インタビュー開始！

新聞を作った感

緑中学校生徒会のわたしたちが作りました

3年生 鈴木 瞬

3年生 吉川 卓真

3年生 佐々木 大輔

3年生 渡邊 舞

3年生 平井 正仁

3年生 春友名 由紀

2年生 前田 真之介

2年生 鈴木 紗織

2年生 中谷 悠介

わたしたち緑中学校生徒会は、毎年フラワーラインに参加しています。そして今年は、フラワーラインについての新聞を作ってほしいと頼まれ、とまどいながらも作成しました。

まず最初に、記事を書くために参加している人たちにインタビューをしました。メモをとったり、録音をしたりして記事を完成させました。

作業中に最も苦労したことは、やはり文章です。正しく、判りやすく書くのは難しいことでしたが、生徒会の全員で知恵を出し合いました。

フラワーラインに参加した緑中学校の生徒たちはしっかりと仕事をし、楽しそうに作業をしていました。インタビューにも快く答えてくれました。

わたしたちも新聞づくりに参加することで、地域の人々と接する良い機会を持つことが出来たと思います。

美園小 5年生が「サケの特別採捕」を体験

川の大切さを考える 貴重な時間に——

幾春別川をよくする市民の会が主催する「サケの特別採捕」体験が平成17年11月2日、幾春別川の川向頭首工下流左岸で開催されました。

今年は岩見沢市美園小学校の5年生約90人が参加しました。子どもたちは生きているサケに触れたり、川の水質や幾春別川にすむ生き物の紹介を聞きながら、川の自然と人との関わりを体験する貴重な時間を過ごしました。サケの特別採捕は平成8年から毎年行われています。遡上したサケの年齢や体長を調べ、放流したサケの回帰状況を知ることで今後の活動などに役立てられています。

これまでにも地元の小学校の生徒が参加して実施してきました。今年は「サケの採捕」の他に、「幾春別川にすむ生き物の紹介」や簡易キットによる「川の水質調査」も行いました。

今回参加した美園小の5年生は3つの班に分かれ、班ごとにそれらを体験していきました。

美園小は岩見沢の市街地にある学校のため、大きな川を体験するのも、生きたサケの姿を見るのも初めてという生徒がほとんどでした。

飛び跳ねるサケを苦労しながら捕まえたり、幾春別川にすむ魚のようすに目を輝かせていました。また、幾春別川の水質を他の川と比べるなど、楽しみながらも真剣に取り組むことができた学習時間だったようです。

測定後にはサケを川に戻しました

川の水質調査

雅美の 体験レポート

カヌーに乗りました！

このコーナは、FMはまなすの千葉雅美レポーターとなり、体験したことを皆さんにお知らせします。

北村の市民団体が行っている旧美唄川の河川調査が、9月16日に水辺の楽校（旧美唄川左岸）で行われました。それに合わせ、河川調査に参加していた高篠さんにカヌーの乗り方を教えていただきました。高篠さんは三笠カヌークラブの会長で、公認カヌー指導員でもあります。

初めての救命胴衣。救命胴衣はきつめにフィットさせないといけません。川に落ちたときに体だけ沈んでしまうのと、肩の部分を引っ張って救助するため、ゆるいと体が抜けてしまうそうです。

まずは、最も基本的なパドルの使い方（さそこぎ）を練習！陸上では簡単に思えたのですが実際に水に入ってみると…。浅瀬で遊いてみましたが、陸上での練習とは違い、水の重みのため10分ほどで腕がだるくなってしまいました。ちょっと不安！

まっすぐに進むのは難しそうで、とても楽しい！緊張しながらもドキドキワクワクの出発です。

少しずつ進むにつれ、疲れ始めの時に感じた興のだるさがなくなっていました。空は青く、時々吹く風が気持ち良かった。水は温ったいましたが触ってみると冷たく、さわやかな気分になりました。

感想

初カヌーは、天気にも恵まれ、とても楽しむことができました。

川に入って見る風景は陸から眺める川の風景と違い、どこか違い国に来ている気分になりました。カヌーは普段、簡単に乗れるものではないので、貴重な経験になりました。岩見沢でもカヌーが気軽にできるところがあるといいですね！こういう川の遊び場、遊び方をもっと地域住民が参加でき、自然を体験できて楽しめる機会が増えるといいなと思いました。

今回の 家・内・人

三笠の湖・川・緑を愛する会
会長
高篠和憲さん

幾春別川流域 ふるさとの祭り

連載③ －北村－

北村は明治33年に岩見沢市から分村し、今年で105年を迎えます。古くは地域の神社での秋祭りがあり、昭和後期には産業振興祭り、平成年代は「きたむら田舎（かっぺ）フェスティバル」が村を代表するお祭りとして行われています。

沼上連発花火

地区ごとの神社を中心に9月8日に秋祭りを実施

北村は明治16年に初めて滝本幕助が入植し、27年に北村雄治が北村農場を開設してその歩みが始まりました。開拓が進むにつれて、幌達布神社、砂浜神社、豊正神社、美唄達布神社、赤川神社など各地区に神社が建てられ、大正8年には村の中心神社として北村神社が建立されています。

これら神社を中心に、秋祭りが各地区9月8日にそろって開かれるようになりました。地域の人たちが、お酒や食べ物を持ち寄って宴会を開くといった内容で、そのうちに子ども御輿（みこし）を繰り出す地区も出てきました。

「産業振興祭り」から若者主体の田舎フェスティバル」へ

秋祭りとは別に、昭和55年から「北村産業振興祭」が行政主導で取り組まれるようになりました。

開催は8月下旬で、農産物や牛肉などの展示・販売を中心に、豊穣パレード、淡水自慢大会、村民運動会などが催され、夏の終わりを村民こぞって楽しむイベントとして定着しました。

この産業振興祭りは、少しずつ改良が図られました。平成元年、村の若者がお祭り集団「きたむら農人若衆」を結成し、「きたむら田舎フェスティバル」に取り組み始めました。

「田舎フェスティバル」は毎年8月の第3土曜日曜に開かれます。産業振興祭りから続く豊穣パレードに始まり、有名タレントなどを招いてのかっぺコンサート、勝ち水番付、連発ぶりが話題の沼上連発花火、花火と並ぶ名物・世界沼上いかだわたりレース、テレホンカードに抽選番号をつけての抽選会などがメインイベントで、村内外から2万から3万人もの人出で賑わいを見せます。また、昨年までは冬の「田舎フェスティバル～遊雪祭～」が開かれていました。

北村の名物「連発花火」

▲沼上いかだわたり

豊穣パレード▼

分村から105年を経て、北村は再び岩見沢市や栗沢町と合併し、新しい道へと歩み出します。これからも村のにぎわいを支えてきた「田舎フェスティバル」は、地域を代表するイベントとして継続されていきます。

川とわたしの思い出

幾春別川をよくする市民の会
副会長　馬渕　智康

最後の清流　四万十川

平成12年4月29日の「みどりの日」に開催された、全国みどりの愛護団体連絡協大臣表彰の授賞式（於皇居）に合わせ、幾春別川をよくする市民の会のメンバー7人で、日本最後の清流と言われる四万十川に行って来ました。

地図を片手に、伊予の国（愛媛県）から土佐の国（高知県）へとひた走り、県道441号線へ入ります。県道とは名ばかりの441号線は、四万十川沿いを走る林道のような道路。車1台がやっと通ることが出来る程度の道ですが、眼下には四万十川が流れていました。

四万十川は両岸を山で囲まれ、深い緑の中を青い水が流れると言う、絵に描いたような美しさで、幾春別川を見慣れたメンバーには、ため息が出るほどの絶景です。

四万十川の沈下橋

少し走ると、小さな橋と看板がありました。「沈下橋」の文字が読めました。「沈下橋、沈下橋」と女性メンバーが大騒ぎして、ここで記念撮影です。その姿を見て地元の人が、不思議そうに通り過ぎます。

それもそのはず。一つしか無いと思っていた橋が、このあと幾つも…。

河口の中村市に近づくにつれ、カヌーやボートで遊ぶ人たちが増え、四万十川が最後の清流として守られているだけでなく、県民に広く愛されている川だと言うことが実感出来た旅でした。

※沈下橋…戦前より、住民の生活道路としてより多くの橋が必要でした。少ない費用でできますが、大水のときに水面下に沈むように造られた橋で、欄干が無いのが特徴です。

わがまちの

名人

アンモナイト木彫名人
三笠市
柴田　肇さん

「アンモナイト化石」で有名な三笠市ですが、それを木彫りで本物そっくりに彫り上げる名人をご紹介いたします。三笠市にお住まいの柴田さんは、この道40年、趣味で彫り続けその数は数百個を数えます。木によって色合いや木肌が微妙に異なり創作意欲がかき立てられるといいます。工房がある「ミカサモダンアートミュージアム」を訪ねました。

―いつ頃から彫刻を始められたのでしょうか。

営林署　現在の森林管理所に入った頃からですから、もう40年ぐらいになります。当時、営林署の加工所ではイベントなどで販売するテーブルやまな板などを職員たちが作っていました。道具も揃っていたので、初めの頃には熊を彫ったこともありました。

―幌内中学校の旧校舎で製作を始めることになったいきさつを教えてください。

幌内中学校の生徒の数が減って平成10年に閉校となりました。その旧校舎を利用して芸術文化交流施設「ミカサモダンアートミュージアム」が開設されたのが平成12年でした。たまたま定年になった年で、運良くこの工房を貸りることができました。

―アンモナイトの彫刻に取り組んだきっかけは何だったのですか。

三笠市はアンモナイトのまちです。三笠の人なら子どもの頃からアンモナイト採集をしてますし、どこの家にも1個や2個の化石はあると思います。とても身近な存在なんです。私は少年時代からアンモナイトが好きでしたので、自然と題材になりました。

―彫刻の難しさや掘る木の材質についてお聞かせください。

掘る木はエンジュ、キハダ、イチイ、センノキなど地元の木を使っています。寒冷地の樹木は年輪が細かい分、非常に硬いので彫りづらいですね。生の木を切って、2年から3年乾かして使います。木は芯の部分から割れてくるので中央部分は使いません。

大きな作品になると樹齢二百年の丸太を使います。完成までおよそ1ヶ月、工程で最も時間がかかるのは仕上げの磨きですね。

―作品へのこだわりとこれからの創作活動についてひと言お願いします。

作品はアンモナイトと台座を別々ではなく一体に彫り上げます。もう一つの特徴はアンモナイトを大小2個、あるいは複数個、必ず台座に並べてあります。

それはアンモナイトも生きていたら、雌雄・夫婦や子どもがいてもいいという発想です。1個だけだと寂しいし面白くありません。少年時代から好きなアンモナイトと樹木、この二つが結びついて創作意欲がかき立てられてきました。時間の許す限り、これからも創作を続けていきたいと思っています。

水辺の風景

北村　尾田　和雄さん
旧美唄川をカヌーで下ったときに撮影しました。
正面奥にピンネシリ岳が見えています。

写真募集

お気に入りの水辺の風景写真をお送りください。

応募方法
●プリント、デジタルデータ、ポジフィルムなど、形態は自由。写真とあなたの「思い」など、簡単なコメントと一緒に送ってください。順番に「大好き！幾春別川」に掲載させていただきます。
※1人何点でも応募可。
※写真の返却はいたしません。
※応募は随時受付
●送付先：下記連絡先
「大好き！幾春別川　水辺の風景係」

狩野橋のたもとにある岩見沢発祥之地碑

連載

川の記憶　幾春別川と橋 ③

岩見沢発祥の地「狩野橋」

岩見沢の元町と北本町を結ぶ「狩野橋」は、道道岩見沢月形線として幾春別川に架かる橋です。

この橋の周辺が、明治16年に狩野末治が旅館業を始めた場所で、岩見沢発祥の地となったところです。

当時、幾春別川はこの付近で大きく蛇行して駅構内付近を流れていました。今よりも川幅があり、水深も深くて水量も豊かだったので、子どもたちにとっては格好の遊び場でした。夏は水泳、冬はそり遊びなどが盛んに行われていました。モクズガニやエビなども良く獲れ、子どもたちを楽しませてきました。

そして、この川は人々の生活に適度の潤いを与えていました。上流の三笠にある炭鉱から、選炭排水に混じって石炭が流れてきたのです。夏の間に川底から石炭を採取し、冬の燃料にしていました。

また、木材も流れてくるので、付近に住む人々は燃料が容易に手に入り、生活の上で大助かりだったようです。ほかにも大正時代の一時期、橋の辺りでは冬になると氷を採集し、魚菜市場の冷凍用に使用していたと言われています。

狩野橋は最初、川向の人たちが自費で架けた木橋だったため「川向橋」と呼ばれていましたが、昭和27年にコンクリート製の橋に架けかえられた時に狩野橋に変更されました。

現在の橋は昭和52年に架けかえられ周辺の町村を結ぶ橋として重要な役割を担っています。

行事予定

EVENT SCHEDULE

■幾春別川新水路通水式
開催日：平成18年2月上旬
場　所：○○○○
主　催：石狩川開発建設部

■幾春別川新水路通水式記念シンポジウム～地域の新たな発展に向けて（予定）
開催日：平成18年2月10日（金）
場　所：北村農村環境改善センター
主　催：石狩川開発建設部

■旧美唄川雪中植林
開催日：平成18年2月11日予定
場　所：北村旧美唄川河川敷地
主　催：NPO法人
山のない北村の輝き

お便りお待ちしております！

本紙は楽しい誌面をつくるため、読者のみなさまからのご意見やご感想をお聞きしております。また、「○○についてぜひ取り上げてほしい！」という話題もお待ちしております。どしどしお寄せください。

【連絡先】
石狩川開発建設部 岩見沢河川事務所内　幾春別川ニュース編集委員会事務局　〒068-0007　岩見沢市7条東9丁目
※ご質問は、郵送またはファックス（0126-25-1697）でお願いします。